

特別シンポジウム
「地震学の今を問う –東北地方太平洋沖地震の発生を受けて–」

日時： 2011年10月15日(土) 9:00～17:00 (受付開始8:45)

場所： 静岡大学 大学会館(静岡市駿河区大谷836)

主催：日本地震学会東北地方太平洋沖地震臨時対応委員会

開催趣旨

本年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波は、1923年の関東大震災以来となる甚大な被害をもたらしました。日本の地震学は、これまで幾多の大地震の経験から多くのことを学んできましたが、今回の被害を見るにつけ、特に災害科学という側面において、地震研究者コミュニティが社会に対して果たしてきた貢献が甚だ不十分であったと言わざるを得ません。我々が進めてきた地震研究の何がいけなかったのでしょうか。これから我々はどのような方向性で研究を進め、どのように社会と関わっていけば良いのでしょうか。我々地震学会員一人一人が、こうした問題を自らのこととして考える必要があります。今回は、そのような議論を学会全体で始めるきっかけとして、このシンポジウムを企画しました。学会員の皆様におかれましては、シンポジウムへの参加と活発なご議論をお願いいたします。地震・津波災害に強い日本社会を実現し、明日の地震学を魅力あるものとするために。

プログラム

9:00	挨拶	日本地震学会会長	平原和朗(京都大学)
	趣旨説明	東北地方太平洋沖地震対応臨時委員会委員長	鷺谷 威(名古屋大学)
9:10	特別講演 「地震科学と災害対策:リセットの時期」		ロバート・ゲラー(東京大学)
9:30	セッション1 東北地方太平洋沖地震は何故想定できなかったのか ーこれからの地震学にむけた問題点の洗い出しー		
10:45	休憩		
10:55	セッション2 地震学会は国の施策とどう関わるのか ー地震研究者・コミュニティの社会的役割とは何かー		
12:10	昼食		
13:10	セッション3 地震学会と地震・津波防災 ー「防災」のために何が足りなかったのか、「防災」と如何に向き合うべきかー		
14:25	セッション4 教育の現場やメディアで地震学の知見をどう伝えるか		
15:40	休憩		
15:50	総合討論	司会 大木聖子(東京大学)・橋本 学(京都大学)	
17:00	終了予定		

注意事項

- ・ 特別シンポジウム会場は、前日までの会場と異なり、静岡大学キャンパス(静岡駅北口からバスで約25分)となりますので、ご注意下さい。
- ・ 会場の都合で、開始時刻が9:00に変更となりました。
- ・ 4日目特別シンポジウムのみご参加で当日登録される方は受付に時間がかかります。シンポジウムへの速やかなご参加のためなるべく事前登録をお願い致します。

セッション１： 東北地方太平洋沖地震は何故想定できなかったのか ーこれからの地震学にむけた問題点の洗い出しー

コンビーナ(五十音順)：堀 高峰(海洋研究開発機構)・松澤 暢(東北大学)・八木勇治(筑波大学)

講演者：

- 1) 松澤 暢(東北大学)
- 2) 井出 哲(東京大学)

趣旨説明：

東北におけるM9地震の短期予知はおろか、その発生可能性を事前に指摘することすらできなかったことは、地震予知研究者はもちろん、地震学全体の大きな敗北である。地震学に対する国民の信頼を取り戻すために、これまで地震予知研究に距離を置いてきた研究者も含め、従来の研究の方向性や実施体制等の問題点について真摯に議論し、今後どうすべきかを考える必要がある。

このセッションは、現在までの地震学のあり方を上記のような観点で見直すとともに、今後の地震学の方向性について皆で構想する場としたい。そのため、松澤暢氏からは、これまでの地震予知研究に欠けていたものが何か、当事者としてレビューして頂き、井出哲氏には、M9地震の発生を受け、今後地震学が進むべき方向性についての議論の口火を切って頂く。

セッション２： 地震学会は国の施策とどう関わるのか ー地震学研究者・コミュニティの社会的役割とはなにかー

コンビーナ(五十音順)：川勝 均(東京大学)・鷲谷 威(名古屋大学)・橋本 学(京都大学)

講演者：

- 1) 長谷川昭(東北大学)
- 2) 石橋克彦(神戸大学)

趣旨説明：

日本地震学会における研究活動の主たる関心は理学的な研究に向けられてきたが、現在の社会において、地震研究者は理学研究以外の面でも多大な期待が寄せられている。その一方で、「地震予知研究」などを通して自らその期待をあおってきた面も否定できない。これまで、国の地震防災や原発の安全対策、放射性廃棄物処理などについて、一部の研究者が中央防災会議や地震本部、原発関係など国の施策に委員会等に参画してきたが、学会そのものは積極的に関与することを避けてきた。今回の東日本大震災では、起こり得る災害を想定できなかったことが批判されているが、そこでは、想定外を生じた行政だけでなく、「見て見ぬふり」をしてきた研究者の側の姿勢も問われている。本セッションでは、地震防災や原発といった国の施策に対して、研究者コミュニティとして今後どのように関わるべきか、またより広くいえば地震学者・コミュニティの社会的役割とはなにかについて、自分達の置かれた立場を再認識した上で、皆で考えたい。

これまで中央防災会議や地震本部の取り組みに関与されてきた長谷川昭氏と、そうした体制の外側から発言を続けてこられた石橋克彦氏から問題提起をして頂き議論を行う。

セッション3： 地震学会と地震・津波防災

－「防災」のために何が足りなかったのか、「防災」と如何に向き合うべきか－

コンビーナ(五十音順)： 泉谷恭男(信州大学)・武村雅之(小堀鐸二研究所)・西村裕一(北海道大学)

講演者：

- 1) 山田真澄(京都大学)
- 2) 後藤和久(千葉工業大学)

趣旨説明：

「防災は大切」と口では言いながら、私達は「地震や津波で人が死ぬという現実」や「原発を停止するかどうかの判断」と「私達の研究」との間の関係について、真面目に考えてきただろうか。例えば、津波警報に使うためには0.1の精度で M_w を求める必要は無い。何らかの手段によって、 M_w が8を大きく越えたことが即座にわかっていたら、巨大な津波が起きると予測できたのではないだろうか。また、巨大な災害を防ぐことを第一の目的とするなら、地震の発生確率よりも、その地域で発生し得る最大規模の地震や津波の調査にもっと努力が向けられるべきではなかったか。更に、理学としての地震学(自然現象の理解)を進めるだけでなく、他分野の考え方や手法を吸収することも大切だったのではないだろうか。自分達の研究と防災との関係について、私達はもう一度真摯に考え直す必要がある。

こうした議論を始めるきっかけとして、地震発生直後の警報に関する研究をされている山田真澄氏と、津波堆積物や津波石といった物証を想定震源やシミュレーションの妥当性評価に用い、防災に活かすための研究をされている後藤和久氏に講演をお願いした。

セッション4： 教育の現場やメディアで地震学の知見をどう伝えるか

コンビーナ(五十音順)： 大木聖子(東京大学)・山田尚幸(気象庁)

講演者：

- 1) 矢崎良明(東京都板橋区立高島第一小学校校長・全国学校安全教育研究会会長)
- 2) 谷原和憲(日本テレビ放送網報道局ネットワークニュース部長)

趣旨説明：

このセッションでは、地震学会は地震学の知見を如何に一般の人に伝えてきたのか、今後どのように伝えていけばよいのか、アウトリーチとしての学校教育やメディアとの関わりについて考えたい。

地震学の知見は、一般市民の暮らしの場において、いかに受け止められ、活用されているのだろうか。我々の多くは、その実態に関心を持つことすらなく研究活動が続けている。例えば小学校においては、理科の授業で地震を扱うことが義務化されたのは今年度からである。防災の授業が持たれる回数は非常に少なく、避難訓練は形骸化して災害発生時の現実とはかけ離れている地域もあるだろう。

一般市民への懸け橋となるメディアはどうだろう。学会員の中には、多くの市民を対象にものごとを正確に伝えることの難しさを知る人もいるだろう。それを職務としているメディアは、何をもっとも尊重して伝えようとしているのか。そのためにどのような努力をされていて、そこにはどのような制約があるのか。

学校現場にて理科教育と安全教育に携わってきた、東京都板橋区立高島第一小学校校長の矢崎良明氏は、地震を理科の単元にいれることに長く努力をされてきた。また、日本テレビの災害報道に長く携わってこられた谷原和憲氏は、研究の現場も理解しつつ、いかにして命を救う情報を出せるかに取り組んでこられた。両氏の講演から、地震学会の研究成果や知見が社会でいかに活用されているか、その実態を知るきっかけとしたい。